別紙2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　趙　建海

本論文は、ルネサンス期の西欧天文学を 17 世紀中国において受容した中国人学者李之藻（1565-1630）の科学思想、とりわけ天文学思想に焦点をあて、その生涯と業績の全容を解明した独創的研究である。

17 世紀初頭、中国にキリスト教の教義とともに西欧学問体系を伝達しようとしたのは主要にイタリア人イエズス会士マッテオ・リッチ（中国名利瑪竇）であった。彼は中国人学者に対して口述訳することによって西欧学問の奥義を伝えようとした。ユークリッドの『原論』を『幾何原本』として漢語訳した徐光啓については比較的研究が進んでいる。だが、天文学文献を翻訳した李之藻に関しては中国においてもほとんど研究されることがなかった。ニーダムの著名な『中国の科学と文明』や我が国の天文学史家藪内清によっても十分な光が当てられることはなかった。趙氏がこの度の博士論文で企図したのは、この重要な学問的欠落を埋めようとしてのことである。

趙氏は、まず李之藻の一般的な思想背景を陽明心学に求め、その思想こそ、西欧の実証的科学思想へと導く役割を果たしたことを確認した。そのような李のもとに登場したのが、クリストフ・クラヴィウスの数理科学思想を身に着けたリッチであった。リッチは、「耶儒結合」、すなわちキリスト教と儒教を結合しようとする思想的態度で中国人に接した。そのような態度は、李が西洋学術に接近することを可能にした。それから、明末の中国宮廷が改暦のために西欧天文学の知識を熱心に求めたことも、李がリッチの数理天文学を学ぶのを容易にした。李は、リッチの科学思想に対するのに、根拠が十分ではないままに信奉するのではなく、中国人としての主体性を保ち、自らその内実を点検し直しながら、中国語で著述する姿勢を維持した。この点が盟友徐光啓との相違点のひとつである。こうして出来たのが、クラヴィウスの初等算術書をもとにした『同文算指』（1614 年刊）、さらには天文観測器具であるアストロラーベ文献を訳述した『渾蓋通憲図説』（1607 年刊）などの著作であった。

趙氏は、李が撰述した西欧学術書を子細に検討し、とくに西欧天文学書から著述された『渾蓋通憲図説』がどのような過程で作成されたか調査するだけではなく、李の観測データを現代観測天文技法によるデータと比較対照するという手続きをもって、李の天文学の知識がどのようなもので、どの程度の精度をもったものであったのかを再構成した。

本論文の独創的貢献をもっと個別的に述べれば、以下のとおりである。

（１）李之藻の中国伝統思想的背景が陽明学の強い影響のもとにあったことを確認しえたこと。

（２）李が関心をもった数学・天文学思想のほぼ全容を解明しえたこと。

（３）李が『渾蓋通憲図説』において示した観測データの精度が現代的観点から見てかなり粗いものであったことを趙氏自身の実測において確認しえたこと。

本論文は、李之藻の業績の全容をほとんど初めて解明しえた点で高く評価される。とりわけ、趙氏が得意とする天文観測技法によって、その観測精度までをも再点検しえたことは並外れている。中国語訳のラテン語原典をも研究すれば、その学問程度はさらに高まったであろう。しかし、それは現代中国の研究水準から見て、余りの高望みと言われるべきであろう。趙氏がこれまで未開拓であった中国天文学史に新たな光を投じたことを評価すべきであろう。それゆえ審査委員全員は、本論文をもって学位取得のために十分であると判断した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。